

「14 世紀の聖地巡礼記に見るイスラーム世界（後期十字軍再考）」

櫻井康人（東北学院大学文学部准教授）

いわゆる啓蒙主義の時代に至るまで、十字軍は中世特有の現象として捉えられ、1270 年の聖王ルイの二回目の十字軍、もしくは 1291 年のアッコン陥落をもってそれは終焉したとの見解が主流を占めていた。しかし、19 世紀の植民主義時代に入り、とりわけフランスにおける「ラテン・オリエン特協会」の設立により、十字軍史料の編纂事業が本格化すると、J・ドラヴィユ・ル・ルルや J・イオルガはメモワール（聖地回復論覚書）・外交文書・年代記などの史料を体系づけ、14 世紀以降にも十字軍がその生命力を保ち続けたことを論じた。この背景には、フランスによるシリア支配を正当化しようとする「フランコ＝シリア主義」の存在があったが、ル・ルルらの主張した「後期十字軍」の存在は、フランスという枠組みを超えて多くの研究者たちに影響を与え、そして彼らによって補強されることとなる。例えば、ル・ルルの成果に全面的に依拠したエジプト人史家 A・S・アティヤの研究は現在においても後期十字軍研究のスタンダードな研究書として高い評価を受けており、二人のドイツ人史家、F・ハイデルベルガーと L・ティールは、教皇関連史料からル・ルルらの論を補強した。ル・ルルらの見解は決してすぐさま広く受け入れられたわけではない。しかし、近年の十字軍研究の主流をしめる多元主義的十字軍観の中で、後期十字軍は完全に市民権を獲得することとなった。とりわけ、十字軍の民衆運動的側面に着目した S・シェインや、メモワールの写本状況を分析した A・レオポルドは、いずれもヨーロッパ世界においては 14 世紀以降も世論として十字軍熱が高揚し続けたと主張している。

このような研究動向を見ると、十字軍の時間枠が拡大解釈されるべきことは認めなくてはならないが、世論としての十字軍熱という点には疑問符を付けなくてはならない。なぜならば、14～16 世紀は一般に「聖地巡礼の黄金期」とも呼ばれている時代だからである。概してメモワールの作者たちが聖地巡礼を十字軍の阻害要素として指摘していたことを考慮に入れると、十字軍熱と聖地巡礼熱との併存をいかに解釈すべきなのであろうか。この点に対して、聖地巡礼研究者たちは概して聖地巡礼者が十字軍のプロパガンディストとして機能したことを示す。しかし、そこには二つの問題がある。一つは、聖地巡礼研究者たちも近年の十字軍研究の成果を前提としていること、および史料の使用方法である。後者についてさらに言うと、メモワールなどを含む旅行記全体を史料として用いること、および網羅的な分析がなされていないことである。以上のことを出発点とし、本報告では 14 世紀の旅行記全 70 作品の内、31 作品を聖地巡礼記、13 作品を巡礼ガイドに分類した上で、世論としての十字軍熱という従来の指摘に関して再考を行った。

考察の結果としては、以下のことが指摘される。聖地回復熱および十字軍熱を記すのは、14 世紀前半の教会人に特有の傾向であった。ここに時代的あるいは社会的相違を読み取ることは単純すぎるが、イスラーム信仰およびそれを実践するムスリムに対する嫌悪感を顕わにするのも 14 世紀前半の教会人に特徴的であったことを併せて考えると、やはり 14 世紀の間に聖地回復に対する考え方がヨーロッパ世界で変化したと考えられる。その変化の

動因となったのがイスラーム支配下において円滑に巡礼を行うことができるという現実であった。スルタンの巡礼許可書はまさにお札であり、巡礼のための金銭を支払いすれば「スルタンの平和」の恩恵を享受することができたのである。このことは、14世紀後半の俗人たちがイスラームおよびムスリムについてほとんど記述しない、という「沈黙」からも裏書きされる。巡礼路の整備とそれによる円滑な巡礼の実行が、彼らにムスリムを信仰の敵として記述する機会を失わせたのであろう。確かに、イスラーム信仰やムスリムへの嫌悪感を示す俗人もいたが、それは教義そのものではなくクルアーンを実践しないムスリムの生活のありように対してであった。それ以上に巡礼者たちが目撃・経験したのは、キリスト教徒と類似の信仰形態をムスリムが持っていることであった。その結果として、14世紀末にはイタリア系俗人の間に「ムスリムの改宗の希望」が見られるのである。ただし、このことが新たな聖地回復熱に繋がっていく可能性も考えられる。この点を考えるには、当然のことながら15世紀以降の聖地巡礼記の分析が必要となってくる。

なお、本報告の詳細な内容については、拙稿「後期十字軍再考（1）—14世紀の聖地巡礼記に見る十字軍観—」『ヨーロッパ文化史研究』第7号、2006年3月、1~50頁、および拙稿「後期十字軍再考（2）—14世紀の聖地巡礼記に見るイスラーム世界—」『ヨーロッパ文化史研究』第8号、2007年3月、37~75頁を参照されたい。